国際芸術祭 あいち 2025

灰と薔薇のあいまに

愛知芸術文化センター
Aichi Arts Center

愛知県陶磁美術館
Aichi Prefectural Ceramic Museum

瀬戸市のまちなか
Seto City

国際芸術祭「あいち」組織委員会
Aichi Triennale Organizing Committee

Aichi Triennale 2025: A Time Between Ashes and Roses

9.13—11.30.2025

プレスリリース｜2024年9月12日

Copyright © 2024 Daisuke Igarashi All Rights Reserved.

「あいち」の国際芸術祭

2010年から3年ごとに開催されており、今回で6回目を迎えます。国内最大規模の芸術祭の一つであり、国内外から多数のアーティストが参加します。愛知芸術文化センターのほか、県内の都市のまちなかにも広域に展開します。現代美術を基軸とし、舞台芸術なども含めた複合型の芸術祭で、ジャンルを横断し、最先端の芸術を「あいち」から発信します。

開催目的

・新たな芸術の創造・発信により、世界の文化芸術の発展に貢献します。
・現代美術等の普及・教育により、文化芸術の日常生活への浸透を図ります。
・文化芸術活動の活発化により、地域の魅力の向上を図ります。

目次

P. 3　開催概要
P. 4–7　テーマ／コンセプト
P. 8–9　企画体制
P. 10–23　参加アーティスト（2024年9月12日時点）
P. 24–25　ラーニング
P. 26–27　キービジュアル、タイプセット／ロゴタイプ
P. 28　主な会場

開催概要

名称	国際芸術祭「あいち2025」（ニーゼロニーゴー） Aichi Triennale 2025
テーマ	灰と薔薇のあいまに A Time Between Ashes and Roses
芸術監督	フール・アル・カシミ Hoor Al Qasimi ［シャルジャ美術財団理事長兼ディレクター／国際ビエンナーレ協会（IBA）会長］
会期	2025年9月13日（土）–11月30日（日）［79日間］
主な会場	愛知芸術文化センター 愛知県陶磁美術館 瀬戸市のまちなか
主催	国際芸術祭「あいち」組織委員会 ［会長　大林剛郎（株式会社大林組取締役会長 兼 取締役会議長）］
助成	令和6年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成事業 公益社団法人企業メセナ協議会 社会創造アーツファンド
事業展開	現代美術 ・国内外のアーティスト及びグループの作品を展示し、国際色豊かな現代美術を紹介します。 ・愛知県美術館を含む愛知芸術文化センターや、愛知県陶磁美術館、瀬戸市のまちなかでの作品展示など、県内での広域展開を図ります。 パフォーミングアーツ ・国内外の先鋭的な演劇、ダンスなどの舞台芸術作品を、愛知芸術文化センターを中心に上演します。 ラーニング ・幅広い層を対象とした様々な「ラーニング・プログラム」を実施します。 連携事業 ・県内の芸術大学を始め、多様な主体との連携による事業を展開します。 ・参加アーティストによる短期間の巡回展示を県内数か所で開催します。

テーマ／コンセプト

灰と薔薇のあいまに

枯れ木に花は咲くのか
灰と薔薇の間の時が来る
すべてが消え去り
すべてが再び始まるときに[1]

モダニズムの詩人アドニスは、1967年の第3次中東戦争の後、アラブ世界を覆う灰の圧倒的な存在に疑問を投げかけ、自身を取り巻く環境破壊を嘆きました。アドニスの詩において、灰は自然分解の結果生じるものではなく、人間の活動による産物、つまり無分別な暴力、戦争、殺戮の結果なのです。環境に刻まれた痕跡を通して戦争を視覚化することで、アドニスは、直接的な因果関係や現代的な領土主義の理解ではなく、地質学的かつ永続的な時間軸を通して戦争の遺産を物語ります。したがって、アドニスにとってそれはただ暗いばかりではありません。消滅の後には開花が続くからです。

この感情は、再生と復活のためには必ず破壊と死が先行するということ、そして人類の繁栄のためには、恐怖を耐え忍びながらその道を歩まなければならないという、一般的な心理的概念を表しています。アドニスは、希望と絶望の感情と闘いながら、新たな未来、現在と過去に結びつく恐怖から解放された未来を思い描きます。戦争を国家、民族、部族、人間中心的なものよりも、集合体としての環境という視点から理解しようとすることで、アドニスは戦争の多様な顔を強調します。すなわち、人類が引き起こした戦争、地球に対する戦争、私たち自身の内なる戦争、他者との戦争、ヒエラルキー・服従・抑圧・飢饉・飢餓・搾取をめぐる象徴としての戦争、資源とエネルギーをめぐる戦争、所有権や著作権をめぐる戦争、希望・夢・想像力をかけた戦争などです。

観察者、目撃者として戦争と破壊を経験したアドニスがこの詩を書いた政治的背景は、私たちの現在の経験にも根差しており、この芸術祭ではそれをさらに拡張しています。「灰と薔薇のあいまに」というテーマにおいて、私は人間が作り出した環境の複雑に絡み合った関係を考えるために、灰か薔薇かの極端な二項対立も、両者の間の究極の境界線も選ばないことにしました。むしろ、啓蒙思想の知識文化から受け継がれた両者の境に疑問を投げかけ、人間と環境が交わる状態、条件、度合いを想定します。今回の芸術祭では、戦争と希望という両極のいずれでもなく、その間にある私たちの環境の極端な状態を受け止めながら、人間と環境の間にあると思われている双方向の道を解体する可能性を探ります。

「灰と薔薇のあいまに」において、私は、人間と自然の関係についての規範的な枠組みとは異なる問いを投げかけます。すなわち、人間が自然を変質させているのでしょうか、それとも自然が人間を変質させているのでしょうか。人間とは単なる生体物質なのでしょうか。内面的で心理的な人間と、外面的で植物的な世界との間に明確な区別はあるのでしょうか。人間と環境の現代的な関係に取り組むとき、人新世から資本新世、プランテーション新世、クトゥルー新世[2]といった規範的な概念を受け入れ、批判するしか方法はないのでしょうか。芸術作品や展覧会制作は、未知の場所としての環境にアプローチし、新たな物語を発掘し、別の視点を見つけることができるのでしょうか。

第6回となる国際芸術祭「あいち2025」では、人間と環境の関係を見つめ、

これまでとは別の、その土地に根差した固有の組み合わせを掘り起こしたいと考えました。農業が機械化され領土が金融化される以前には、世界の至るところで共同体が自然を管理し、環境景観との相互関係を発展させていました。そうした共同体は、自然の権利や保護を意識し、それを取り巻く動植物の生息地との間に親近感を感じて、互いに信頼し、育み、補い合う道を築いていました。この芸術祭では、そのような枠組みを現代的な芸術実践の一部として歓迎します。

このキュレトリアルなアプローチは、人間の痕跡が上に刻まれた複合体としての環境という現代的な想像力とは異なる、環境と共にある想像力の上に成り立っており、またそれを育むものでもあります。農業、化石燃料の採掘、深海採掘、資源の略奪、原料となる天然資源の開発といった活動が、帝国主義的な構造から受け継がれた成長中心の考え方と同様に、人間が環境に対して絶えずダメージを与えるシステムを構築し、また人間が環境に依存する危険な構造を発展させてきたことは、周知のとおりです。加えて、環境に関する私たちの知識は人間中心的であり、自分たちの利益のために環境を変質・改造することができる存在として、人間を人間以外の生命体よりも優位に置いています。

人間は、原材料を収奪できる空間へと環境を均す専門技術を持ったエンジニアであるだけでなく、人類の間に存在する不平等を再強化してもいます。今日私たちが占有している環境は、ある共同体が他の共同体よりも恩恵を受け、その生活の質が高まるように、異質化され、細分化され、分類され、モデル化されています。現在のグリーンエネルギー化の言説もまた、片方の半球にいる人々のためのものであり、他方で環境回復のために欠かせない方策の恩恵を受けることのできない共同体が、世界中至るところに存在しているように思われます。このように、今日の人間と環境にまつわる実践の多くは、人種、社会、差別についての知識や考え方を何度も繰り返しているのです。

この結果、地球上の多くの地域が、何世紀にもわたって資源を採掘してきた植民地帝国の名残を生き、多国籍の食料・エネルギー・農業企業によって身動きが取れない現状に直面しています。こうした共同体の多くは、西側世界の植民地の遺産が作り出した人間と環境の関係から不当に大きな影響を受けており、そのような現在の都市と市民の構造は、私たちが今目にしている地球規模の変化の不可避的な原因となっているのです。そうした変化は、絶え間なく続く先住民族の大量虐殺と領土の略奪、植民地化された領土での数十年にわたる核実験、そして生活環境の壊滅的な喪失と人々の屈辱をもたらした、プランテーションや鉱山での強制労働の暴力とトラウマといった遺産の上に存在しています。このことは、私たちの寿命よりも長いスパンで感じられるようなかたちでこの惑星の地質を変え、そして今もなお変え続けており、人類そのものの生存に深刻な影響を及ぼしています。

今回の芸術祭では、現在の人間と環境の関係に関する一筋縄ではいかない物語や研究を念頭に置きながらも、私たちが直面している極端な終末論も楽観論も中心としないことを目指しています。私は、環境正義[3]に関する対話に複雑さを重ねることによってのみ、私たちが自らの責任に向き合い、不正義への加担に気づくことができるのだと考えています。ヒエラルキーの押しつけや偏った読み方を避けるために、世界中からアーティストやコレクティブを招き、私たちが生きる環境について既に語られている、そしてまだ見ぬ物語を表現するのです。アドニスが想像したように、試練を乗り越えて死や破壊に耐えるからこそ自然は回復力を持つのでしょうか。それとも、生命を奪われ機械化された空疎な気候フィクション[4]が表現するディストピア的で黙示録的な未来像が、今まさに私たちが生きる現実なのでしょうか。愛知県に根差した今回の芸術祭には、灰と薔薇の間にある日本独自の環境に対する想像力も組み込まれます。愛知県は陶磁製品の産地として、瀬戸市は「せともの」の生産地として知られています。周囲の環境から得た素材や資源を用いるこれらの地場産業は、アーティストたちの新作の中にも立ち現れてくるでしょう。こうした産業は、地域の誇りの源であり、人間と環境の関係についての新たなモデルを模索する本芸術祭の支柱となります。たとえばこの地では、歴史的な写真や資料で目にする陶磁製品の生産によって作り出された灰のような黒い空は、環境の汚染や破壊よりも、むしろ繁栄を意味していました。このように普遍主義的な人新世という人間中心の批評の視点から脱却する時、技術、地域に根差した知識、帝国の歴史、環境に対する想像力について、どのような思考が浮かび上がってくるのでしょうか。地場産業や地域遺産は、人間と環境の複雑に絡み合った関係について、新たな、幅を持った思考への道を開くのでしょうか。

今回の芸術祭ではさらに、手塚治虫の『来るべき世界』を始め、日本の大衆文化、小説、映画、音楽のさまざまなシーンや事例もまた参照します。手塚の物語では、アメリカ合衆国とソビエト連邦になぞらえた国同士の緊迫した関係が原爆の開発競争――それは日本の現代化と環境の状態に深く絡んだ歴史でもあります――を招き、偶然にも「フウムーン」と呼ばれる突然変異の動物種を生み出してしまいます。フウムーンは人間を超える能力と知性を持ち、多くの動物と少数の人々を地球から避難させる作戦を考えます。自然と人間の副産物であるフウムーンが、窮地を救うためにやって来るわけです。

『来るべき世界』は、今回の芸術祭のテーマとアドニスの詩に共鳴しつつ、終末と開花の間を横断します。愛知県という地域性、アドニスや手塚といった作家への参照、そして参加アーティストたちが共に示すのは、「灰と薔薇のあいまに」を掲げるこの芸術祭が、幅を持った考え方、有限なもの、そして中間にある状態を採り入れることによって、当然視されてきた位置づけやヒエラルキーを解きほぐせるということなのです。

国際芸術祭「あいち2025」芸術監督
フール・アル・カシミ

1 Adonis, "An Introduction to the History of the Petty Kings," *A Time Between Ashes and Roses*, 1970.
2 人新世とは、人類が地球の環境を激変させた近現代を、地質年代として指す言葉。それに対し、深刻な環境破壊を招いたのは人類全体ではなく資本主義やプランテーション化を伴う植民地主義だとする立場（資本新世、プランテーション新世）や、そもそも人類を中心に据えずに、あらゆる種類の生物や非生物から精霊や神話の登場人物までが、堆肥のように共に混じりながら「地下世界に（chthonic）」生きるべきだという立場（クトゥルー新世）がある。
3 出自や所得の多寡にかかわらず公平に安全な環境で暮らす権利を持つこと。
4 気候変動がもたらす悪影響にまつわるフィクション。

Theme / Concept

A Time Between Ashes and Roses

How can withered trees blossom?
A time between ashes and roses is coming
When everything shall be extinguished
*When everything shall begin again**

After the Six Day War of 1967, the modernist poet Adonis lamented the environmental destruction of his surroundings, questioning the overwhelming presence of ashes in the Arab World. Ash, in Adonis's poem, is not generated through general decomposition but as a result of human activity, in this case through senseless acts of violence, war and carnage. Visualising the War through its imprints in the environment, he signifies its legacy through a geologic and everlasting time view rather than immediate causes-and-effects or a present-day understanding of territoriality. In this way, it is not all gloom for Adonis, as after extinction comes blossoming.

This sentiment illustrates a common psychological concept: for renewal and rebirth, destruction and doom must precede it; for humanity to prevail, horror must be endured and take its course. Adonis grapples with feelings of hope and despair to envision a new future, a future freed from horrors tied to the present and the past. In his extrapolation of war from the national, ethnic, tribal, and the human-centred towards a collective environment, he foregrounds the multiplicitous expressions of war: the human-made war, the war on the planet, the war within ourselves, the war with others as well as the symbolism of the war on hierarchy, subjugation, oppression, famine, hunger, exploitation; the war on resources and energy; the war of possession and authorship; the war for hope, dreams and imagination.

The political context of Adonis' writing of the poem, who experiences states of war and destruction as an observer and witness, is grounded in our experience of the present and expanded upon in this triennial. In *A Time Between Ashes and Roses*, I chose neither binary extreme of ashes nor roses as ultimate frontiers to conceive of the entangled relationships of the human-made environment. I question the boundary between them–inherited from Enlightenment knowledge cultures–and posit states, conditions and spectrums of human-environmental pathways. Rather than polarities, the triennial acknowledges extremes of our environmental condition, between war and hope, and explores decomposition possibilities of the two-way street conceived between humans and their environment.

In *A Time Between Ashes and Roses*, I question lines of inquiry separate from the canonical framing of the human-nature relationship: Are humans decomposing nature nor is nature decomposing humans? Are humans biomatter? Are there clear distinctions between the interior, psychological human, and the exterior, botanical world? Must we accept and critique canonical concepts–from the Anthropocene to Capitalocene to Plantationocene to Chthulucene–when addressing contemporary relationships between the human and the environment? Can art and exhibition-making approach the environment as a place of the unknown and to unearth new narratives and observe alternative perspectives?

For the sixth edition of the Aichi Triennale, I wanted to look at the relationships between human beings and the environment to unearth alternative land-based and indigenous assemblages. Prior to the mechanisation of agriculture and financialization of territory, communities from around the world stewarded nature and developed reciprocity with their environmental landscapes, conceiving of rights and protections of nature, as well as building paths of kinship, reliance, nutrition and replenishment with their surrounding habitats. This triennial hails this framework as part of contemporary artistic practices.

This curatorial approach builds on while also fostering a different imagination about contemporary imagination of the environment as a portmanteau of the human's imprint *on it*, not with it. It is cognizant that human activities such as agro-farming, fossil-fuel extraction, deep-sea mining, exploitation of raw natural resources as well as growth-centred mentalities inherited from imperial structures, have created a system in which the human has no respite over the environment and developed dangerous structures of dependence. Additionally, our knowledge about the environment is human-centred, placing us as superior to nonhuman lifeforms, able to alter and modify it for our benefit.

Not only is the human a technocratic engineer flattening the environment into spaces for the appropriation of raw materials, it also re-enforces the inequalities which exist within human species. The environment we occupy today is orientalised, speciated, classified and modelled to benefit some communities over others and to enhance some communities' quality of life over others. Current discourse of greening energy also seems reserved for those who are positioned in different hemispheres with many communities from around the world unable to benefit from critical environmental rehabilitative strategies. Thus, much of today's human-environment practices reiterate racial, social and discriminatory knowledge and thinking.

Consequently, a large proportion of the globe lives and inherits centuries-long extractive colonial empires and finds their present condition calcified by multinational food, energy and agriculture corporations. Many of these communities are disproportionately affected by these human-environment relationships created by virtue of the western world's colonial legacies whose current urban and civil structures are overwhelmingly responsible for the global changes we're now seeing. It builds on the continuing genocide of indigenous people and their territories, the decades-long nuclear tests on colonised territories, legacies of violence and trauma in plantations and mines where forced labour has resulted in devastating loss of environmental life and indignity of people. This has changed and continues to change the geology of the planet in ways that will be felt beyond our lifespans, with severe implications for humanity's survival.

While acknowledging the formidable narratives and research about the human-environment relationships of the present, in this triennial I aim to decenter both the apocalyptic and optimistic extremes we find ourselves compelled to run to. I find it is only through layering complexity in our dialogue about environmental justice can we face our responsibilities and realise our complicity. To avoid imposing a hierarchy or preference for one reading over the other, this triennial invites artists and collectives from all over the world to realise existing and unknown narratives about the environment in which we occur. Is nature resilient because of how it is tested, and endures death and destruction as imagined by Adonis? Or are the dystopian, apocalyptic cli-fi futures which are void of life, mechanised and made superficial, a truly lived reality?

Rooting the triennial in Aichi Prefecture, Japan's own environmental imagination, between ashes and roses, will also be embedded in the exhibit. Aichi is a locus of ceramic production and Seto City is famous for the fabrication of *Setomono*. These local industries which work with the surrounding environment's materials and resources, will feature in the artist commissions. Since these industries are a source of local pride, they support the triennial's exploration for alternative models of human-environment relationship. As an example, in Aichi, historic photographs and archives which depict ashy black skies generated from the production of ceramics signified prosperity rather than pollution and destruction. Thus, what conceptions of technology, locally-based knowledge, imperial history, environmental imaginations come up when we decenter the universalist Anthropocenic critique? Do such local industries and heritage pave way for alternative and spectral thinking about the human-environment entanglement?

Additionally, various moments and instances of Japanese popular culture, its fiction, films and music will also be referenced, such as *Nextworld* by Osamu Tezuka. In the novel, the USA and USSR are competing with each other in the atomic bomb race–a history deeply intertwined with the modern making of Japan and its environmental condition–and accidentally creates a race of mutant animals known as Fumoon. They are gifted with psychic powers and intelligence beyond humans who formulate a strategy to evacuate hundreds of animals and a small group of people off planet Earth. The Fumoon, a byproduct of nature-human species come to save the day.

Resonating with the theme of this triennial as well as Adonis's poem, *Nextworld* is a traversal between apocalypse and blossoming. Altogether, these references, the locality of the Aichi Prefecture, writers such as Adonis and Tezuka, as well as the participating artists, *A Time Between Ashes and Roses* is a triennial which shows that in adopting the spectral, limited and in between, assumed positionalities and hierarchies can come undone.

Hoor Al Qasimi
Artistic Director, Aichi Triennale 2025

*Adonis, "An Introduction to the History of the Petty Kings," *A Time Between Ashes and Roses*, 1970.

企画体制

芸術監督｜Artistic Director

フール・アル・カシミ
Hoor Al Qasimi

［シャルジャ美術財団理事長兼ディレクター／国際ビエンナーレ協会（IBA）会長］

Photo: SEBASTIAN BÖTTCHER

アラブ首長国連邦をはじめ中東、そして世界中のアートを繋ぐ支援者として、2009年にシャルジャ美術財団を設立し、現在は理事長兼ディレクターを務める。新たな試みやイノベーションの支援に情熱を注ぎ、国際巡回展をはじめ、レジデンス・プログラム、コミッション・ワークや制作助成、パフォーマンスや映画のフェスティバル、建築物の調査や保存、幅広い年齢層に向けた教育プログラムまで、同財団の活動領域を広げてきた。
第6回シャルジャ・ビエンナーレ（2003）の共同キュレーターとなって以来、同ビエンナーレのディレクターを務め、2023年の第15回シャルジャ・ビエンナーレのキュレーターに就任。また、2017年には国際ビエンナーレ協会会長に選出された他、シャルジャのアフリカ・インスティテュート会長や建築トリエンナーレ会長兼ディレクターとしても活動。過去にはMoMA PS1（ニューヨーク）やユーレンス現代美術センター（北京）などのボードメンバーも歴任。さらに、2026年に開催される第25回シドニー・ビエンナーレのアーティスティック・ディレクターに指名された。

学芸統括｜Head of Curatorial

飯田志保子
Iida Shihoko

［キュレーター］

Photo: ToLoLo studio

東京都生まれ。名古屋市在住。1998年の開館準備期から11年間東京オペラシティアートギャラリーに勤務。2009年から2011年までブリスベンのクイーンズランド州立美術館／現代美術館内の研究機関に客員キュレーターとして在籍。韓国国立現代美術館2011年度インターナショナル・フェローシップ・リサーチャー。アジア地域の現代美術、共同企画、芸術文化制度と社会の関係に関心を持ち、ソウル、豪州複数都市、ニューデリー、ジャカルタ、ミラノで共同企画を実践。第15回アジアン・アート・ビエンナーレ・バングラデシュ2012、あいちトリエンナーレ2013、札幌国際芸術祭2014キュレーター、あいちトリエンナーレ2019、国際芸術祭「あいち2022」チーフ・キュレーター（学芸統括）を務めた他、2014年から2018年まで東京藝術大学准教授。国際美術館会議（CIMAM）会員、国際ビエンナーレ協会（IBA）会員、美術評論家連盟（AICA）会員。

キュレーター（現代美術）｜Curator (Contemporary Art)

入澤聖明
Irizawa Masaaki

［愛知県陶磁美術館学芸員］

大阪府生まれ。京都市立芸術大学大学院修士課程芸術学領域修了。京都国立近代美術館キュレトリアル・インターンシップを経て、2015年から2017年までアサヒグループ（旧アサヒビール）大山崎山荘美術館で学芸員として勤務。2018年より現職。専門は日本の近・現代陶芸史。芸術表現としての陶芸だけでなく、産業的な視点も軸として展覧会を企画。近年の主な担当展に「異才 辻晉堂の陶彫―陶芸であらざるの造形から」（2020年）、「昭和レトロモダン―洋食器とデザイン画」（2022年）、「やきもの現代考―内⇄外―」（2022年）、「ホモ・ファーベルの断片」（2022年）。その他、西枝財団キュレーター助成事業として「Dividing Line ― Connecting Line」（2013年／川井遊木 共同企画）に参画。

キュレーター（パフォーミングアーツ）｜Curator (Performing Arts)

中村茜
Nakamura Akane

［パフォーミングアーツ・プロデューサー］

Photo: Takuya Matsumi

東京都生まれ。日本大学芸術学部在籍中より舞台芸術に関わる。2004年から2008年までSTスポット横浜プログラムディレクター、2006年株式会社precogの立ち上げに参画、2008年より同社代表取締役。2016年から2018年までアジアン・カルチュラル・カウンシル（ACC）のグランティとしてバンコクとニューヨークに滞在。現代演劇、コンテンポラリーダンスのアーティストやカンパニーの国内外の活動をプロデュースするとともに、サイトスペシフィックなフェスティバルや領域横断的な人材育成事業、動画作品をバリアフリーと多言語で配信するプラットフォーム事業などを手掛ける。海外ツアーや共同制作のプロデュース実績は30カ国70都市に及ぶ。2012年から2014年まで国東半島アートプロジェクト及び国東半島芸術祭（国東半島芸術祭実行委員会主催）パフォーミングアーツプログラム・ディレクター。2019年、True Colors Festival ～超ダイバーシティ芸術祭～（日本財団主催）アソシエイトディレクター兼副事務局長。2020年、アクセシビリティに特化したオンライン劇場「THEATRE for ALL」統括プロデュース。令和3年度（第72回）文化庁芸術選奨・文部科学大臣賞新人賞【芸術振興部門】受賞。

キュレーター（ラーニング）｜Curator (Learning)

辻琢磨
Tsuji Takuma

［建築家］

Photo: goitami

静岡県生まれ。横浜国立大学大学院建築都市スクールY-GSA修了後、橋本健史、彌田徹とともに2011年に建築コレクティブ403architecture [dajiba]（以下403）を設立。403として、2014年「富塚の天井」にて第30回吉岡賞受賞、2016年ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館にて審査員特別表彰、あいちトリエンナーレ2016出展等、国内外への出展多数。2017年に個人事務所となる辻琢磨建築企画事務所を浜松市にて設立後は、403と並行して、建物や空間の断続的でなめらかな変化をテーマに活動している。2019年には、あいちトリエンナーレ芸術大学連携プロジェクトの講師を、2020年から2024年まで名古屋造形大学地域社会圏領域特任講師を歴任。

キュレトリアルアドバイザー（現代美術）｜Curatorial Adviser (Contemporary Art)

石倉敏明
Ishikura Toshiaki

［人類学者／
秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻准教授］

シッキム、ダージリン、ネパール、東北日本等でのフィールド調査、環太平洋の比較神話学や複数種をめぐる芸術人類学の研究、アーティストとの協働制作や展覧会企画協力を行う。多摩美術大学芸術人類学研究所助手、明治大学野生の科学研究所研究員を経て現職。2019年、第58回ヴェネチア・ビエンナーレ国際芸術祭日本館展示「Cosmo-Eggs | 宇宙の卵」に参加。共著書に『Lexicon 現代人類学』、『モア・ザン・ヒューマン マルチスピーシーズ人類学と環境人文学』（以上、以文社）など。

趙純恵
Cho Sunhye

［福岡アジア美術館学芸員］

東京都生まれ。福岡市在住。日本国内や東アジア地域での展覧会アシスタント、コーディネーター等を経て、あいちトリエンナーレ2016のアシスタント・キュレーターを担当。2016年より福岡アジア美術館（学芸課収集展示係）の学芸員に着任。専門はアジア現代美術。近年は、汎アジアの移民当事者の美術史および視覚表現についての調査を行っている。美術館で担当した主な展覧会に、「アジア美術からみるLGBTQと多様性社会」（2019）、「福岡アジア美術館開館20周年記念展アジア美術、100年の旅」（2019）、「メッセージ—アジア女性作家たちの50年」（2020）、「水のアジア」（2023）などがある。

参加アーティスト（2024年9月12日時点）

アーティスト名		生 / 結成年	出身 / 結成地	活動拠点
現代美術				
バゼル・アッバス& ルアン・アブ＝ラーメ	Basel Abbas and Ruanne Abou-Rahme	1983 1983	キプロス 米国	米国、パレスチナ 米国、パレスチナ
マイサ・アブダラ	Maitha Abdalla	1989	アラブ首長国連邦	アラブ首長国連邦
ジョン・アコムフラ	John Akomfrah	1957	ガーナ	英国
マリリン・ボロル・ボール	Marilyn Boror Bor	1984	グアテマラ	グアテマラ
ミネルバ・クエバス	Minerva Cuevas	1975	メキシコ	メキシコ
エレナ・ダミアーニ	Elena Damiani	1979	ペルー	ペルー
ソロモン・イノス	Solomon Enos	1976	米国	米国
シモーヌ・ファタル	Simone Fattal	1942	シリア	フランス
札本彩子	Fudamoto Ayako	1991	日本	日本
ウェンディー・ヒュバート	Wendy Hubert	1954	豪州	豪州
イキバウィクルル	ikkibawiKrrr	2021結成	韓国	韓国
加藤泉	Kato Izumi	1969	日本	日本
是恒さくら	Koretsune Sakura	1986	日本	日本
マユンキキ	Mayunkiki	1982	日本	日本
シャイハ・アル・マズロー	Shaikha Al Mazrou	1988	アラブ首長国連邦	アラブ首長国連邦
ムルヤナ	Mulyana	1984	インドネシア	インドネシア
ワンゲチ・ムトゥ	Wangechi Mutu	1972	ケニア	ケニア、米国
永沢碧衣	Nagasawa Aoi	1994	日本	日本
ダラ・ナセル	Dala Nasser	1990	レバノン	レバノン
小川待子	Ogawa Machiko	1946	日本	日本
大小島真木	Ohkojima Maki	2023結成	日本	日本
沖潤子	Oki Junko	1963	日本	日本

アーティスト名		生 / 結成年	出身 / 結成地	活動拠点
フリストドゥロス・パナヨトゥ	Christodoulos Panayiotou	1978	キプロス	キプロス
マイケル・ラコウィッツ	Michael Rakowitz	1973	米国	米国
シルビア・リバス	Silvia Rivas	1957	アルゼンチン	アルゼンチン
西條茜	Saijo Akane	1989	日本	日本
佐々木類	Sasaki Rui	1984	日本	日本
ヤスミン・スミス	Yasmin Smith	1984	豪州	豪州
冨安由真	Tomiyasu Yuma	1983	日本	日本
アドリアン・ビシャル・ロハス	Adrián Villar Rojas	1980	アルゼンチン	拠点を定めずに活動

パフォーミングアーツ

AKN プロジェクト	AKN PROJECT	2020 発足	日本	日本
ブラック・グレース	Black Grace	1995 結成	ニュージーランド （アオテアロア）	ニュージーランド （アオテアロア）
クォン・ビョンジュン	Kwon Byungjun	1971	韓国	韓国
オル太	OLTA	2009 結成	日本	日本
セルマ&ソフィアン・ウィスィ	Selma & Sofiane Ouissi	1975 1972	チュニジア チュニジア	チュニジア、フランス チュニジア
態変	TAIHEN	1983 結成	日本	日本

– アーティスト名は原則として姓のアルファベット順。
– アーティストの生／結成年、出身／結成地、活動拠点は、作品制作の背景にある社会的、文化的な文脈の参考として表記しています。
また必要に応じて、先住民族の言語による地域名を併記しています。

※ クレジットの記載がない画像は作家提供

バゼル・アッバス&ルアン・アブ=ラーメ
Basel Abbas and Ruanne Abou-Rahme

バゼル・アッバス、1983年ニコシア(キプロス)生まれ。ニューヨーク(米国)、ラマッラ(パレスチナ)拠点。／ルアン・アブ=ラーメ、1983年ボストン(米国)生まれ。ニューヨーク(米国)、ラマッラ(パレスチナ)拠点。

《May amnesia never kiss us on the mouth: only sounds that tremble through us》2020-22 | Photo: Christian Øen | © Astrup Fearnley Museet, 2023.

バゼル・アッバスとルアン・アブ=ラーメは、サウンド、映像、文章、インスタレーション、パフォーマンスなど、様々な分野で共に活動するアーティスト。二人の取り組みは、パフォーマティビティ、政治的イマジナリー、肉体、仮想世界の横断にある。二人のアプローチの特徴は、サウンド、映像、テキスト、オブジェなど、既存の素材や自作の素材をサンプリングし、それらを全く新しい「台本」に再構築することである。その成果として、マルチメディア・インスタレーションやサウンドと映像のライブ・パフォーマンスという形で、サウンド、映像、テキスト、サイトが持つ政治的、情緒的、物質的な可能性を追求する表現を展開している。

主な発表歴

2024 個展「The song is the call, and the land is calling」コペンハーゲン・コンテンポラリー／ニイ・カールスベルグ・グリプトテク美術館(デンマーク)
2024 個展「Only sounds that tremble through us」MIT リスト・ヴィジュアル・アーツ・センター(マサチューセッツ、米国)
2023 個展「An echo buried deep deep down but calling still」アストルップ・ファーンリ現代美術館(オスロ、ノルウェー)
2022 個展「May Amnesia Never Kiss Us on the Mouth」ニューヨーク近代美術館(米国)／ミグロ現代美術館(チューリッヒ、スイス)

マイサ・アブダラ Maitha Abdalla

1989年コールファッカン(アラブ首長国連邦)生まれ。アブダビ(アラブ首長国連邦)拠点。

《EVAPORATING SUNS》2023

様々なジャンルを横断するマイサ・アブダラは、映像、写真、彫刻、絵画、ドローイング、パフォーマンスを組み合わせる。演劇のパフォーマンス性と演出空間を活かし、民俗学や神話、ジェンダー、社会規範、心理学といった幅広いテーマを探求して制作を行うアブダラにとって劇場は、社会での経験や想像、記憶、空想を客観的に見つめる場である。彼女は、抽象と具象が往来する幻想的な舞台で自己の探求を続ける。その表現にはドラマ性と哀愁が漂い、しばしば自身の弱さを晒すような、生活空間に閉じ込められたキャラクターを演じる。アブダラにとって制作過程はパフォーマンスの延長線上にあり、絵具を指で塗り重ね、木炭で自身の輪郭をなぞるなど、身体を用いたアプローチを特徴とする。

主な発表歴

2023 「Evaporating Suns: Contemporary Myths from the Arabian Gulf」バーゼル H. ガイガー文化財団(スイス)
2023 第15回シャルジャ・ビエンナーレ「Thinking Historically in the Present」(アラブ首長国連邦)
2022 「Portrait of a Nation II」タバリ・アート・スペース(ドバイ、アラブ首長国連邦)
2022 個展「INT. The Body - Sunrise」クロムウェル・プレイス(ロンドン、英国)

ジョン・アコムフラ John Akomfrah

1957年アクラ(ガーナ)生まれ。ロンドン(英国)拠点。

《Vertigo Sea》2015 | © Smoking Dogs Films; Courtesy of Smoking Dogs Films and Lisson Gallery.

アーティスト、映画制作者として著名なジョン・アコムフラは、記憶、ポスト植民地主義、一時性、美学を探求し、世界中に存在する移民に着目して、しばしばディアスポラをテーマにしている。1982年にはロンドンで、デヴィッド・ローソンやリナ・ゴポールらとともに、影響力を持つブラック・オーディオ・フィルム・コレクティブを設立。ローソン、ゴポールとの協力関係は今なお続いており、アシティー・アコムフラを加えたスモーキング・ドッグ・フィルムズとして活動している。記録映像、スチール写真、撮り下ろし、ニュース映画を組み合わせた多層的な視覚様式で制作した画期的なマルチチャネル映像のインスタレーションは、国際的に注目を集めている。

主な発表歴

2024 第60回ヴェネチア・ビエンナーレ、英国館(イタリア)
2023-24 個展「A Space of Empathy」フランクフルト・シルン美術館(ドイツ)
2023 個展「Five Murmurations」国立アフリカ美術館(ワシントンD.C.、米国)
2023-24 個展「Arcadia」ザ・ボックス(プリマス、英国)
2022-24 個展「John Akomfrah: Purple」ハーシュホーン博物館(ワシントンD.C.、米国)

マリリン・ボロル・ボール Marilyn Boror Bor

1984年サンフアンサカテペケス（グアテマラ）生まれ。グアテマラ（グアテマラ）拠点。

《They too, the mountains, gave us back concrete.》2022

マヤ・カクチケル族のアーティスト、マリリン・ボロル・ボールは、キュレーター、美術教授、カルチュラル・マネージャーとしても活動する。幅広い素材を用いた社会参加型の芸術実践で知られるサン・カルロス・グアテマラ大学を卒業後（美術学士）、先住民のアイデンティティ、歴史的記憶、植民地主義、抵抗などをテーマとするプロジェクトを手がける。自国グアテマラ内外で多数の個展やグループ展に参加し、中南米以外にも、米国、スペイン、スイス、ドイツ、マレーシア、英国などで発表。革新的な現代アーティスト100人強を紹介する『Prime: Art's Next Generation』（Phaidon／2022）にも選出された。

主な発表歴

2024 「Fugas de lo nuestro. Visualidades indígenas de sur a norte」サルバドール・アジェンデ連帯美術館（サンティアゴ、チリ）
2024 「Musa. Perspectivas femeninas en las Colecciones del MAMM y MAC Panamá」メデジン近代美術館（コロンビア）
2023 第35回サンパウロ・ビエンナーレ「choreographies of the impossible」（ブラジル）
2023 第23回パイス・アート・ビエンナーレ「I drank words submerged in dreams」（グアテマラ、グアテマラ）
2022 「COMMUNICATING VESSELS. Collection 1881–2021」ソフィア王妃芸術センター（マドリード、スペイン）

ミネルバ・クエバス Minerva Cuevas

1975年メキシコシティ（メキシコ）生まれ。メキシコシティ（メキシコ）拠点。

《The Trust》2023 | Courtesy of Kurimanzutto Mexico, New York.

ミネルバ・クエバスは、サイトスペシフィックなアクションや作品を通して、社会圏の実像を描写するリサーチ型のプロジェクトを展開するアーティスト。資本主義体制とその社会的帰結に内在する価値、取引、資産の概念を研究し、日常生活に潜む反逆の可能性を探る。インスタレーション、動画、壁画、彫刻、公共空間への介入など幅広いメディアを介して、ブランドロゴに見る身近な視覚表現をもじって、人々の政治的虚像に根付く概念に疑問を投じ、ソーシャル・コミュニケーションの活性化を狙っている。主な研究分野はエコロジー運動、人類学、企業史。1998年にMejor Vida Corpを、2016年にInternational Understanding Foundationを設立。

主な発表歴

2023 「Re/Sisters: A Lens on Gender and Ecology」バービカン・センター（ロンドン、英国）
2023 個展「Game Over」フメックス美術館（メキシコシティ、メキシコ）
2021 第11回ソウル・メディアシティ・ビエンナーレ「One Escape at a Time」ソウル市立美術館（韓国）
2019 「SOFT POWER」サンフランシスコ近代美術館（米国）
2005 第7回シャルジャ・ビエンナーレ「Belonging」（アラブ首長国連邦）

エレナ・ダミアーニ Elena Damiani

1979年リマ（ペルー）生まれ。リマ（ペルー）拠点。

《Relief I》2023 | Photo: Juan Pablo Murrugarra

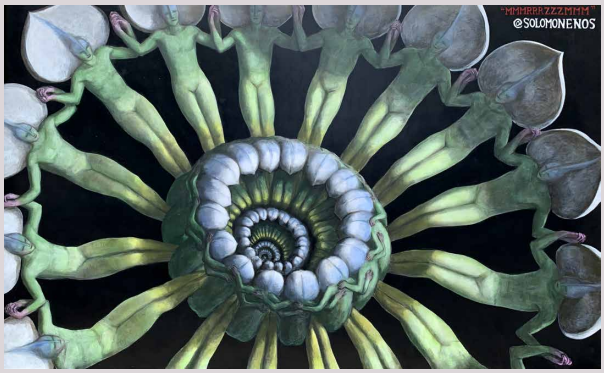
エレナ・ダミアーニは、地質学、地理学、地図学、考古学、天文学を用い、このような領域の分類や、物理的世界に対する私たちの理解を解釈し直す。ダミアーニの作品は、地質年代、歴史、そして人類の軌跡の分類に対する別の読み方を提示している。彼女の表現には、ほんの束の間地上に存在する人間よりも、はるかに長い期間に渡って存在する構造物が、どのように形成され、機能するかを理解したいという思いが顕著に表れている。こうした思いが、私たちが生きる世界の様々な段階や自然のプロセスに対して私たちが抱いている考えを再解釈しようと試みる彼女の一連の探究を形成している。

主な発表歴

2023 第12回ソウル・メディアシティ・ビエンナーレ「THIS TOO, IS A MAP」ソウル市立美術館（韓国）
2022 「Chosen Memories: Contemporary Latin American Art from the Patricia Phelps de Cisneros Gift and Beyond」ニューヨーク近代美術館（米国）
2022–23 「Abundant Futures. Works from the TBA21 Collection」アンダルシア現代美術創造センター（C3A）（コルドバ、スペイン）
2022 個展「Ensayos de lo sólido」リマ現代美術館（ペルー）
2015 第56回ヴェネチア・ビエンナーレ、国際美術展「All the World's Futures」（イタリア）

ソロモン・イノス Solomon Enos

1976年オアフ(米国)生まれ。オアフ(米国)拠点。



《MMMRRRZZZMMM》2019

ネイティブ・ハワイアンの画家ソロモン・イノスは、イラストレーター、壁画アーティスト、ゲームデザイナー、教育者、語り部であり、また35年の経験を持つ地域社会の活動家でもある。ハワイのホノルルを拠点に活動しているイノスの作品は、ハワイだけでなく、世界中でも目にすることができる。イノスは、地域で貢献活動をリードする家族のもとに生まれ、幼い頃から自己の文化を伝え、作品を通して希望を語り継ぐ「ナラティブ」の制作に携わる事を受け継いできた。

主な発表歴

2023 第15回シャルジャ・ビエンナーレ「Thinking Historically in the Present」(アラブ首長国連邦)
2019 ホノルル・ビエンナーレ2019「TO MAKE WRONG / RIGHT / NOW」(米国)
2016–17 「CTRL+ALT: A Culture Lab on Imagined Futures」477ブロードウェイ(ニューヨーク、米国)
2016–17 「'Ae Kai: A Culture Lab on Convergence」旧フードランド アラモアナセンター跡地(ホノルル、米国)
2012 第7回アジア・パシフィック・トリエンナーレ、クイーンズランド州立美術館 | 現代美術館(ブリスベン、豪州)

シモーヌ・ファタル Simone Fattal

1942年ダマスカス(シリア)生まれ。パリ(フランス)拠点。

《Mushrooms in a Forest》2023 | Photo: Wolfgang Günzel.

レバノンで育ち、ベイルートのエコール・デ・レトルで哲学を専攻。その後パリに渡り、ソルボンヌ大学に入学。1969年にベイルートに戻った後、ビジュアル・アーティストとして活動を開始し、レバノン内戦が始まるまで絵画作品を発表し続けた。1980年にレバノンを離れ、カリフォルニアに移住。革新的な作品に特化した現代文学の出版社ポスト・アポロ・プレスを設立した。1988年にサンフランシスコ・アート・インスティテュートに入学したのをきっかけにアーティストとしての実践を再開し、彫刻に新たな情熱を傾けるようになる。

主な発表歴

2024 個展「metaphorS」セセッション館(ウィーン、オーストリア)
2023 個展「The Manifestations of the Voyage」ポルティクス(フランクフルト、ドイツ)
2022 第59回ヴェネチア・ビエンナーレ、国際美術展「The Milk of Dreams」(イタリア)
2021 個展「Finding a Way」ホワイトチャペル・ギャラリー(ロンドン、英国)
2019 個展「Works and Days」MoMA PS1(ニューヨーク、米国)

札本彩子 Fudamoto Ayako

1991年山口県生まれ。京都府拠点。

《pavlov's dog》2021

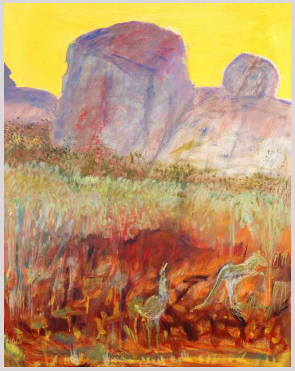
札本彩子は、食品工場やフードデリバリーで働いた経験をもとに、現代の食を考察している。これまで、食卓にのぼらないまま廃棄される食品を目の当たりにしてきた札本にとって、消えゆく食品のレプリカを制作することは、食の記憶の再現であり、自身を取り巻く食の状況の整理でもある。

主な発表歴

2024 「アーティスト・イン・ミュージアム AiM Vol.16 札本彩子」岐阜県美術館
2023 「なめらかでないしぐさ　現代美術 in 西尾」尚古荘不言庵(愛知)
2023 個展「Replicant— 食卓のかたち—」東御市梅野記念絵画館・ふれあい館(長野)
2022 「Kyoto Art for Tomorrow 2022—京都府新鋭選抜展」京都文化博物館
2020 個展「Black Box」KUNST ARZT(京都)

ウェンディー・ヒュバート Wendy Hubert

1954年インジバルンディ・カントリー／ピルバラ（豪州）生まれ。
インジバルンディ・カントリー／ピルバラ（豪州）拠点。



《Hunting Place》2024

ウェンディー・ヒュバートはインジバルンディの長老であり、無形文化財保持者、アーティスト、言語学者でもある。ピルバラ（西豪州）のレッドヒル・ステーションで生まれ、その後ミンダルー・ステーション、オンスローを経てロウバーンに定住。その地での地域保健活動を通じて夫と出会い、3人の息子を授かる。2019年にジュルワル・アート・グループで絵画制作を始め、幼少期に見ていた風景やインジバルンディとグルマ・カントリーの重要な場所を描いた風景画で知られるアーティストとなる。「私は自分の故郷（カントリー）とその掟を知っています。インジバルンディの守り手として、老いてもその考え方と生き方を貫いています。」（ウェンディー・ヒュバート 2021年）

主な発表歴

2024 個展「ウェンディー・ヒュバート：NGURRA GOONMARDII」
サロン・アート・プロジェクツ（ダーウィン、豪州）
2024 「The Good Shed, Perth Represent: Aboriginal Figurative Practice in WA, Part 2」
フォーム・ギャラリー（パース、豪州）
2024 第24回シドニー・ビエンナーレ「Ten Thousand Suns」（豪州）
2023 「Telstra NATSIAA」ノーザンテリトリー博物館・美術館（ダーウィン、豪州）
2022 「Tracks We Share」西オーストラリア州立美術館（パース、豪州）

イキバウィクルル ikkibawiKrrr

2021年ソウル（韓国）で結成。ソウル（韓国）拠点。ジョ・ジウン、1975年ソウル（韓国）生まれ。／キム・ジュンウォン、1996年ソウル（韓国）生まれ。／ゴ・ギョル、1994年チェジュ島（韓国）生まれ。

《Seaweed Story》2022

2021年結成のイキバウィクルルは、自然現象、人間、生態系間の繋がりを探求するビジュアルリサーチバンド。「イキバウィ」とは、「苔が生えた岩」を意味し、「クルル」は擬音語である。苔は、空気と地面の境界線に生息し、小さな身体にもかかわらず周囲に適応し、他世界との境界線に沿って自らの世界を拡張する。イキバウィクルルは、苔の生存方法から生まれた動きが境界の重なりを厚くするという事を、アプローチの手がかりとしている。苔の生き様をコレクティブの手法に取り入れ、個々の活動以上のものとして自らの実践を広め、生活と美術の境界層を広げることを目指している。

主な発表歴

2023 第12回ソウル・メディアシティ・ビエンナーレ「THIS TOO, IS A MAP」
ソウル市立美術館（韓国）
2023 第14回光州ビエンナーレ「soft and weak like water」（韓国）
2023 第40回エヴァ・インターナショナル（リムリック、アイルランド）
2023 「DMZ Exhibition: CHECKPOINT」キャンプ・グリーブス（坡州、韓国）
2022 ドクメンタ15（カッセル、ドイツ）

加藤泉 Kato Izumi

1969年島根県生まれ。東京都拠点。

《無題 Untitled》2023 | Photo: 岡野圭 | © 2023 Izumi Kato

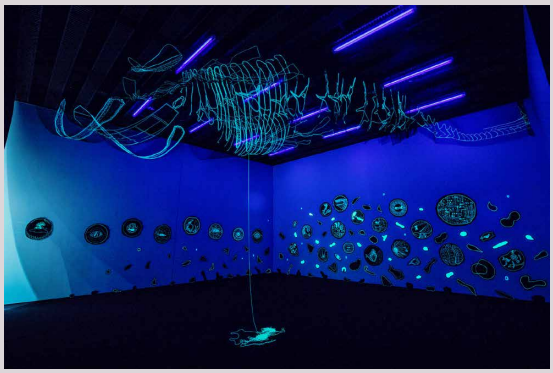
加藤泉の絵画や彫刻には、未分化な原始生物、胎児、動物、またはそれらのハイブリッドのような存在が表象されている。人間、自然、環境をめぐる根源的な関係が見出される彼の作品は、胎内回帰を想起させながら、新たな神話的物語を紡ぎ出しているようでもある。2007年の第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展「Think with the Senses — Feel with the Mind. Art in the Present Tense」に選出されたのをきっかけに、国内外で精力的に発表を行う。近年では、木彫に彩色を施した従来の彫刻に加え、ソフトビニール、プラモデル、石、布地、アルミニウム、ブロンズも素材に加わり、加藤の絵画の意識はソフト・スカルプチャーやインスタレーションへと拡張している。

主な発表歴

2022–23 個展「寄生するプラモデル」ワタリウム美術館（東京）
2021–22 個展「STAND BY YOU」SCAD Museum of Art（サバンナ、米国）
2019–20 個展「LIKE A ROLLING SNOWBALL」原美術館／ハラ ミュージアム アーク（東京／群馬）
2019 個展「Izumi Kato」カーサ ワビ財団（プエルト・エスコンディード、メキシコ）
2018 個展「Izumi Kato」レッドブリック美術館（北京、中国）

是恒さくら Koretsune Sakura

1986年広島県生まれ。広島県拠点。



《鯨を解き、鯨を編む》2021 | Photo: KOIWA Tsutomu | Courtesy of Sendai Mediatheque.

2010年アラスカ大学フェアバンクス校卒業。在学中はネイティブ・アート、絵画、彫刻を学ぶ。2017年東北芸術工科大学大学院修士課程修了。国内外各地の鯨類と人の関わりや海のフォークロアをフィールドワークを通して探り、エッセイや詩のリトルプレス、刺繍作品として発表する。リトルプレス『ありふれたくじら』主宰。2018年〜2020年、東北大学東北アジア研究センター災害人文学ユニット学術研究員。2022年〜2023年、文化庁新進芸術家海外研修制度・研修員としてノルウェーに滞在し、オスロ大学東洋言語学科の研究プロジェクト「Whales of Power」に客員研究員として参加。

主な発表歴

2024 「currents / undercurrents—いま、めくるめく流れは出会って」国際芸術センター青森
2023 「Whales of Power」オスロ大学人文社会学図書館(ノルウェー)
2022 「VOCA展2022 現代美術の展望—新しい平面の作家たち—」上野の森美術館(東京)
2022 「NITTAN ART FILE 4 ：土地の記憶〜結晶化する表象」苫小牧市美術博物館(北海道)
2021 「ナラティブの修復」せんだいメディアテーク(宮城)

マユンキキ Mayunkiki

1982年北海道生まれ。北海道拠点。

《Siknure – Let me live》2022 | Photo: Stuart Whipps | Courtesy of Ikon Gallery.

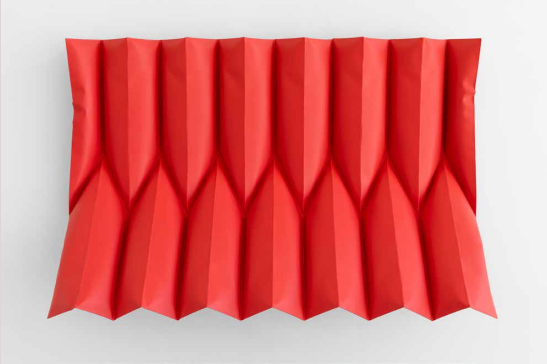
アイヌの伝統歌を歌う「マレウレウ」「アペトゥンペ」のメンバー。2021年よりソロ活動開始。2018年より、自身のルーツと美意識に纏わる興味・関心からアイヌ女性の伝統的な文身「シヌイェ」の研究を開始。現代におけるアイヌの存在を、あくまで個人としての観点から探求し、表現している。

主な発表歴

2024 「翻訳できない わたしの言葉」東京都現代美術館
2022 個展「SIKNURE – Let me live」アイコン・ギャラリー(バーミンガム、英国)
2021–22 リボーンアート・フェスティバル2021–22「利他と流動性」石巻市街地、旧サウナ石巻(宮城)
2021 個展「SINRIT シンリッ：アイヌ女性のルーツを探る出発展」CAI03 (北海道)
2020 第22回シドニー・ビエンナーレ「NIRIN」(豪州)

シャイハ・アル・マズロー Shaikha Al Mazrou

1988年シャルジャ(アラブ首長国連邦)生まれ。ドバイ(アラブ首長国連邦)拠点。



《Accordion Structure》2022

シャイハ・アル・マズローは、シャルジャ大学美術デザイン学部を卒業。2014年にロンドン芸術大学チェルシー・カレッジ・オブ・アーツで芸術修士号を取得し、MFA学生賞を受賞した。その後、母校シャルジャ大学で彫刻の授業を担当、現在は、ニューヨーク大学アブダビ校にて准教授を務めている。アル・マズローの彫刻における実験と探究は、物質性の表現、すなわち形式と内容の緊張関係と相互作用を表わしており、同時に素材とその物理的特性の直感的で鋭敏な理解でもある。アル・マズローは、色彩理論から幾何学的抽象主義に至るまで、フォルムと素材に焦点を当てた現代のアートムーブメントの概念を統合・進化させている。

主な発表歴

2024 アートバーゼル香港、香港コンベンション&エキシビションセンター
2022–23 個展「Dwelling in the Gap」ロウリー・シャビビ (ドバイ、アラブ首長国連邦)
2022 フリーズ・スカルプチャー2022、リージェンツ・パーク(ロンドン、英国)
2022 デザート Xアル・ウラー2022 (サウジアラビア)
2020 「Rearranging the Riddle」マラヤ・アートセンター(シャルジャ、アラブ首長国連邦)

ムルヤナ Mulyana

1984年バンドン（インドネシア）生まれ。ジョグジャカルタ（インドネシア）拠点。

《Sea Remember》2018 | Collection of Paulus Ong.

ムルヤナ（マングモエル）は、毛糸や布を用いて表現するビジュアル作家。2012年にバンドンのインドネシア教育大学美術学部を卒業し、同年「Mogus World」展を開催後、ジョグジャカルタに拠点を移した。Mogusとは、自らの分身であるタコの怪物で、海中を模した生態系を背景に作り上げた。マングモエルの作品は、毛糸が主な素材で、鉄の構造物や他の素材も支柱等に使用し、巨大なフォルムを成している。また、主要素材を節約するため、モジュラー式となっている。自分の着想が環境に間接的な影響を及ぼすことを意識し、新しい毛糸ではなく、バンドンにある工場の余り物の毛糸を使用している。節約と素材のリサイクルにもなると考え、これが作品のコンセプトの核となっている。

主な発表歴

2023 「Imagery of Eastern Nusantara Sea」KINスペース（ジャカルタ、インドネシア）
2023-24 「BLUTOPIA」エアサイド（香港）
2023 個展「Modular Utopia」USCフィッシャー美術館（ロサンゼルス、米国）
2023 「水のアジア」福岡アジア美術館
2018 《Sea Remembers》アートジョグ2018「Enlightenment」ジョグジャカルタ国立博物館（インドネシア）

ワンゲチ・ムトゥ Wangechi Mutu

1972年ナイロビ（ケニア）生まれ。ナイロビ（ケニア）、ニューヨーク（米国）拠点。

《Sleeping Serpent》2014 | Courtesy of the Artist and Victoria Miro London.

ワンゲチ・ムトゥの作品は、「人間の表象」という概念そのものを扱っている。私たちは自らをどのような存在として捉え、これが自分たちだと信じているイメージを再生産しているのか。また他者をどのように見て、そのイメージを作り出しているのかを表現している。ムトゥは、形象の比喩的表現との対話を繰り返すことにより、私たちが自らに抱いているイメージや思いを曇らせたり高めたりする、アートの領域内外における私たちの価値体系に疑問を投げかける。彫刻、絵画、映画、インスタレーション、コラージュなど、多様な技法と媒体で国際的に評価されているムトゥの作品には、ハイブリッドな女性生物や、色鮮やかなディストピア的で夢のような光景が登場する。

主な発表歴

2023-24 個展「Wangechi Mutu: Intertwined」ニュー・ミュージアム（2023、ニューヨーク、米国）／ニューオリンズ美術館（2024、米国）
2023 第15回シャルジャ・ビエンナーレ「Thinking Historically in the Present」（アラブ首長国連邦）
2022 個展「Wangechi Mutu」ストーム・キング・アートセンター（ニューヨーク、米国）
2021 個展「Wangechi Mutu: I Am Speaking, Are You listening?」リージョン・オブ・オナー美術館（サンフランシスコ、米国）
2019-20 個展「The Façade Commission: Wangechi Mutu, The NewOnes, will free Us」メトロポリタン美術館（ニューヨーク、米国）

永沢碧衣 Nagasawa Aoi

1994年秋田県生まれ。秋田県拠点。

《山景を纏う者》2021

永沢碧衣は、主に東北の狩猟・マタギ文化に関わり、自らも狩猟免許を取得。狩猟者としての経験を重ねていくことで出会う種々のものとの関係性を記録・表現した絵画作品を制作している。巨視と微視を行き来することで「人と生物と自然」の相関を問い、それらの境界線を溶解し消化することが創作の原動である。解体した熊から膠を抽出したり、切り株をキャンバスに見立てたり、石から絵の具を採取するなど、素材としてもモチーフとしても、日々山と向き合いながらフィールドワークを重ね、生命の根源や循環、記憶の痕跡を辿る旅を続けている。

主な発表歴

2024 「アケヤマ—秋山郷立大赤沢小学校—」大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2024（新潟）
2024 「弘前エクスチェンジ #06 白神覗見孝」弘前れんが倉庫美術館（青森）
2023 「Material, or」21_21 DESIGN SIGHT（東京）
2023 「シン・ジャパニーズ・ペインティング 革新の日本画—横山大観、杉山寧から現代の作家まで」ポーラ美術館（神奈川）
2021 個展「霧中の山に抱かれて」北秋田市阿仁公民館（秋田）

ダラ・ナセル Dala Nasser

1990年スール（レバノン）生まれ。ベイルート（レバノン）拠点。

《Adonis River》2023

多様な素材を用いて、抽象概念とオルタナティブなイメージを表現する芸術家、ダラ・ナセルは絵画、パフォーマンス、そして映画などのジャンルを横断した作品を手掛ける。ナセルの作品は、資本主義と植民地主義的な搾取の結果として悪化していく環境、歴史、政治的な状況に、人間と人間以外のものがどのように関わり合っているかを探求する。ナセルは、伝統的な風景画の広大な視点とは対照的に、土地をインデックス的に捉えた絵画で、政治や環境における侵食に焦点を当てる。彼女は自らの作品を通して、人間の言葉が届かない中で環境がゆっくりと侵され、侵略せし者が搾取を行い、インフラが崩壊する様子を、人間以外のものの視点から表現する。

主な発表歴

2024　ホイットニー・ビエンナーレ2024「Even Better than the Real Thing」ホイットニー美術館（ニューヨーク、米国）
2023　個展「Adonis River」ルネサンス協会（シカゴ、米国）
2023　第15回シャルジャ・ビエンナーレ「Thinking Historically in the Present」（アラブ首長国連邦）
2022　第58回カーネギー・インターナショナル、カーネギー美術館（ピッツバーグ、米国）
2022　個展「Red in Tooth」ケルン美術協会（ドイツ）

小川待子 Ogawa Machiko

1946年北海道生まれ。東京都拠点。

《結晶と記憶：五つの山》2020 | Photo: Tadayuki Minamoto | Courtesy of Shibunkaku

東京芸術大学工芸科を卒業後、1970年からパリ国立高等工芸学校を経た後、人類学者の夫の調査助手として西アフリカ各地で3年半を過ごし、現地の土器づくりの技法を学ぶ。パリ滞在中に鉱物博物館で、鉱物の美しさの中に「かたちはすでに在る」という考え方を見だし、ゆがみ、ひびや欠け、釉薬の縮れなどの性質を活かし、つくることと壊れることの両義性を内包する「うつわ」として、始原的な力を宿す作品を制作している。

主な発表歴

2023　「Shiryū Morita, Machiko Ogawa」ギャラリー・フランク・エルバズ（パリ、フランス）
2023　フリーズ・マスターズ2023（ロンドン、英国）
2023　「エマイユと身体」銀座メゾンエルメスフォーラム（東京）
2022　「Toucher le Feu」国立ギメ東洋美術館（パリ、フランス）
2019　《掘りだされたとき》（コミッション・ワーク）カタール国立美術館（ドーハ）

大小島真木 Ohkojima Maki

2023年東京都で結成。東京都拠点。
大小島真木、1987年東京都生まれ。／辻陽介、1983年東京都生まれ。

《明日の収穫》2017–18 | Photo: Mari Habaya | © Maki Ohkojima with Agros Art Project All Rights Reserved. | 青森県立美術館寄託

大小島真木は、「絡まり、もつれ、ほころびながら、いびつに循環していく生命」をテーマに制作活動を行うアーティスト。これまでにインド、ポーランド、中国、メキシコ、フランスなどで滞在制作を行う。2017年にはタラ オセアン財団が率いる科学探査船タラ号太平洋プロジェクトに参加。2023年より辻陽介とアートユニットを形成し、「大小島真木」のユニット名義で活動している。近年は美術館、ギャラリーなどにおける展示の他、舞台美術なども手掛ける。

主な発表歴

2024　「美術館堆肥化宣言」青森県立美術館
2023–24　個展「千鹿頭 CHIKATO」調布市文化会館たづくり（東京）
2022　個展「つくりかけラボ09：コレスポンダンス」千葉市美術館
2022　「地つづきの輪郭」セゾン現代美術館（長野）
2018–19　個展「L'œil de la Baleine/ 鯨の目」パリ・アクアリウム（フランス）

沖潤子 Oki Junko

1963年埼玉県生まれ。神奈川県拠点。

《anthology》2023 | FUJI TEXTILE WEEK | Photo by Kenryou Gu

生命の痕跡を刻み込む作業として布に針目を重ねた作品を制作。下絵を描く事なしに直接布に刺していく独自の文様は、シンプルな技法でありながら「刺繍」という認識を裏切り、観る者の根源的な感覚を目覚めさせる。古い布や道具が経てきた時間、またその物語の積み重なりに、彼女自身の時間の堆積をも刻み込み紡ぎ上げることで、新たな生と偶然性を孕んだ作品を生み出す。存在してきたすべてのもの、過ぎ去ったが確かにあった時間。いくつもの時間の層を重ねることで、違う風景を見つけることが制作の核にある。

主な発表歴

2022 個展「沖潤子 さらけでるもの」神奈川県立近代美術館鎌倉別館
2021 GO FOR KOGEI 2021「特別展Ⅰ工芸的な美しさの行方 工芸、現代アート、アール・ブリュット」那谷寺(石川)
2020 個展「anthology」山口県立萩美術館・浦上記念館
2017 個展「月と蛹」資生堂ギャラリー(東京)
2016 「コレクション展1 Nous ぬう」金沢21世紀美術館(石川)

フリストドゥロス・パナヨトゥ Christodoulos Panayiotou

1978年リマソール(キプロス)生まれ。リマソール(キプロス)拠点。

「MARCH, APRIL, NOVEMBER」Sylvia Kouvaliでの展示風景、 2021 | Photo: Lewis Ronald

フリストドゥロス・パナヨトゥは、彫刻、絵画、インスタレーション、パフォーマンス、写真、映像など、幅広い媒体を駆使し、歴史と時間の視覚的および物質的記録のなかに潜むナラティブを明らかにする。ダンスを始めとする舞台芸術の実践や歴史と演劇人類学の研究を踏まえ、パナヨトゥはしばしば、身のまわりにある物など既存の素材の再文脈化や、パフォーマンスを用いた介入を含む表現を行う。

主な発表歴

2023–24 個展「One Year」リュマ・アルル (フランス)
2019–20 個展「Act II: The Island」カムデン・アート・センター (ロンドン、英国)
2015 第56回ヴェネチア・ビエンナーレ、キプロス館(イタリア)
2013 個展「Days and Ages」ストックホルム近代美術館(スウェーデン)
2013 個展「In The Light Of The Day The Fireflies Are Like Any Other Insect」CCA北九州

マイケル・ラコウィッツ Michael Rakowitz

1973年ニューヨーク(米国)生まれ。シカゴ(米国)拠点。

《The invisible enemy should not exist (Lamassu of Nineveh)》2018 | Photo: Gautier DeBlonde © | Courtesy of the Mayor of London.

マイケル・ラコウィッツは、問題の解決と発生が交差するような場において、多領域を横断しながら活動するアーティストである。植民地主義や地政学的対立など、様々な形での強制排除によって文化財や人々が居場所からの退去を強いられていることに着目し、日用品に新たな意味を与えたり型破りなアプローチを取り入れ、問題の周知を図る。2018年には、ハーブ・アルパート芸術賞を受賞し、ロンドンのトラファルガー広場の第4の台座に作品を展示する名誉を得た。2020年にはパブリック・アート・ダイアローグ賞、およびナッシャー賞を受賞。現在、ハーグ市からの委嘱で、考古学と移民の流れをテーマとした公共プロジェクトを手掛けている。

主な発表歴

2021 「England's Creative Coast」ターナー・コンテンポラリー(マーゲート、英国)
2020 「Our World is Burning」パレ・ド・トーキョー(パリ、フランス)
2019–20 個展「Legatura imperfetta」ホワイトチャペル・ギャラリー(ロンドン、英国)/ カステッロ・ディ・リヴォリ現代美術館(イタリア)/ ジャミール・アートセンター(ドバイ、アラブ首長国連邦)
2019–20 個展「The Invisible Enemy Should Not Exist」マルメ市立美術館(スウェーデン)
2012 ドクメンタ13 (カッセル、ドイツ)

シルビア・リバス Silvia Rivas

1957年ブエノスアイレス（アルゼンチン）生まれ。ブエノスアイレス（アルゼンチン）拠点。

《Buzzing Dynamics》（ビデオ・スチル）2010

シルビア・リバスは、映像インスタレーション、パフォーマンス、空間と関わるオブジェで知られ、アルゼンチンやラテンアメリカで領域横断的な表現を行うアーティストの草分けとして評価を得てきた。1990年代から隠喩的な可能性をもったさまざまな媒体や技術を取り入れ、時間の概念と人間が置かれている状況を探究してきた。リバスは、普遍的でありながら状況に依存するようなものを想起させることで、具体的な体験を通した連想を促そうとする。リバスの考えでは、激動する状況に直面した人々にとって大きな力となるのは、まさにその瞬間の認識に根ざして粘り強く抵抗する姿勢なのである。彼女の作品は、映像がリアルなものであるという仮定に疑問を投げかけ、視聴覚に訴えかける物語の力を振り返り、その映像自体とその映像が参照しているものを疑う。数多くの美術館においてグループ展や個展を開催し、その作品は国内外の公立および私立コレクションに収蔵されている。

主な発表歴

2024　個展「Cronotopías」ボゴタ近代美術館（コロンビア）
2010　個展「Zumbido, Contemporáneo 26」
　　ブエノスアイレス・ラテンアメリカ芸術博物館（アルゼンチン）
2005　第5回メルコスール・ビエンナーレ「Direções no Novo Espaço」（ポルトアレグレ、ブラジル）
2004　個展「Everything from the outside」ブエノスアイレス現代美術館（アルゼンチン）
2003　第8回ハバナ・ビエンナーレ「Art with life」ウィフレド・ラム現代美術センター（キューバ）

西條茜 Saijo Akane

1989年兵庫県生まれ。京都府拠点。

《果樹園》2022 | Photo: Takeru Koroda | Courtesy of ARTCOURT Gallery | 森美術館蔵

西條茜は、陶磁器の表面がさまざまな質感で装飾される一方、内部には虚ろな空洞を孕むというギャップから「身体」との親和性を見出し、独自の陶造形を手がけている。またパフォーマーとともに陶造形に息や声を吹き込むサウンドパフォーマンスを行うほか、世界各地にある窯元などに滞在し、地元の伝説や史実に基づいた作品も制作している。

主な発表歴

2024　「コレクションズ・ラリー 愛知県美術館・愛知県陶磁美術館 共同企画」愛知県美術館
2023–24　「私たちのエコロジー：地球という惑星を生きるために」森美術館（東京）
2023　個展「やまの満ち引き」文化村クリエイション vol.3 なら歴史芸術文化村
2022　「第1回 MIMOCA EYE / ミモカアイ」（大賞受賞）丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（香川）
2019　第4回金沢・世界工芸トリエンナーレ「越境する工芸」金沢21世紀美術館（石川）

佐々木類 Sasaki Rui

1984年高知県生まれ。石川県拠点。

《植物の記憶：Subtle Intimacy (2012–2022)》2022 | Photo: Yasushi Ichikawa

身近にある自然や生活環境にインスピレーションを得ながら、主に保存や記録が可能な素材であるガラスを用い、自分が存在する場所で知覚した「微かな懐かしさ」の有り様を探求している。 北欧やアメリカを中心に滞在制作に招聘され、国内外の美術館で展示活動を行う。主な賞歴は、第33回Rakow Commission 2018（2019年、コーニングガラス美術館／アメリカ）、富山ガラス大賞展2021大賞（富山市ガラス美術館）。ラトビア国立美術館、金沢21世紀美術館（石川）など作品収蔵多数。ニューヨークタイムズ紙などで作家特集掲載。

主な発表歴

2024　「コレクション展1」金沢21世紀美術館（石川）
2024　個展「雪の中の青」アートコートギャラリー（大阪）
2023　個展「Subtle Intimacy: Here and There」ポートランド日本庭園（米国）
2021　GO FOR KOGEI 2021「特別展Ⅰ工芸的な美しさの行方
　　工芸、現代アート、アール・ブリュット」那谷寺（石川）
2013　瀬戸内国際芸術祭2013、粟島（香川）

ヤスミン・スミス Yasmin Smith

1984年ダルグ・カントリー／シドニー（豪州）生まれ。ダルグ・カントリー／シドニー（豪州）拠点。

《FOREST》2022 | Photo: THE COMMERCIAL, SYDNEY | Courtesy of the artist and THE COMMERCIAL, SYDNEY.

ヤスミン・スミスは陶芸と釉薬技術を駆使した彫刻による大規模なインスタレーションを制作し、徹底した現地調査、地域社会との協働、スタジオ制作を通して特定の土地を探求する。科学と芸術を融合し、釉薬の造形美を通して、生態系がもつ知性に形を与えている。スミスは、労働、採取主義、植民地化、政治生態学などについてのコンセプチュアルな調査を含む幅広い素材研究において、植物、灰、岩石、石炭、塩、自然土などの有機物や無機物を用いる。展覧会のため海外に長期滞在して、新作に取り組むこともある。作品の多くは豪州の公的機関に収蔵されている。ザ・コマーシャル（シドニー）での2022年制作の《Forest》は、豪州各地の石炭火力発電所から採掘した石炭灰による釉薬に関する4年間の調査の成果であり、深い地質学的な時間軸を表現したものであった。

主な発表歴

2024 ラゴス・ビエンナーレ2024「REFUGE」タファワ・バレワ・スクエア（ナイジェリア）
2022 第10回アジア・パシフィック・トリエンナーレ、クイーンズランド州立美術館 | 現代美術館（ブリスベン、豪州）
2020–21 「Rethinking Nature」マードレ - ドンナレジーナ現代美術館（ナポリ、イタリア）
2019 「Cosmopolis #2: rethinking the human」ポンピドゥー・センター（パリ、フランス）
2018 第21回シドニー・ビエンナーレ「Superposition: Equilibrium and Engagement」（豪州）

冨安由真 Tomiyasu Yuma

1983年広島県生まれ。東京都拠点。

《The Doom》2021 | Photo: 西野正将 | Courtesy of Art Front Gallery.

冨安由真は、心霊や超常現象、夢など不可視なものや科学では解明されていない事象を手掛かりに、現実と非現実の境目を探る作品を制作する。近作では、視点の重なりや次元の行き来を観客に意識させるような大型の体験型インスタレーションを、絵画や立体、映像、サウンド、VR、演劇的な演出といった様々なメディアを駆使しながら表現してきた。冨安は、画中画などの絵画の持つ構造に強い関心があり、特に最近の作品では、入れ子構造を持つ絵画が重要なオブジェクトとなったインスタレーションを数多く発表している。現代社会において見過ごされがちな、不確かで曖昧なものを拾い上げ、観客がそのなかで次元の重なりや俯瞰的視座を体感できるような構造を模索している。

主な発表歴

2023 個展「影にのぞむ」原爆の図 丸木美術館（埼玉）
2022 瀬戸内国際芸術祭2022、豊島（香川）
2021–22 個展「アペルト15 冨安由真 The Pale Horse」金沢21世紀美術館（石川）
2021 個展、KAAT EXHIBITION 2020「冨安由真展 漂泊する幻影」KAAT神奈川芸術劇場
2018 個展、第12回 shiseido art egg「冨安由真展 くりかえしみるゆめ Obsessed With Dreams」資生堂ギャラリー（東京）

アドリアン・ビシャル・ロハス Adrián Villar Rojas

1980年ロサリオ（アルゼンチン）生まれ。拠点を定めずに活動。

《Mi familia muerta (My Dead Family)》2009 | Photo by Carla Barbero

アドリアン・ビシャル・ロハスは、共同制作やコラボレーションによる長期的なプロジェクトを構想してきた。その大規模でサイト・スペシフィックなインスタレーションの数々は、堂々とした印象を与えるのと同時に、どこか脆さも感じられる。ビシャル・ロハスは、彫刻、ドローイング、ビデオ、執筆、行為や事象の痕跡などを組み合わせながら、すでに絶滅に遭ったか、絶滅に瀕して危険にさらされている人間の状態を研究し、過去、現在、未来が折り重なるポスト人新世時代における、種間の境界線を探る。

主な発表歴

2022 個展「The End of Imagination」ニュー・サウス・ウェールズ州立美術館ザ・タンク（シドニー、豪州）／バス美術館（マイアミ、米国）
2017–18 個展「The Theater of Disappearance」ゲフィン・コンテンポラリー・アット・MOCA（ロサンゼルス、米国）／メトロポリタン美術館（ニューヨーク、米国）／アテネ国立観測所ネオン（ギリシャ）／プレゲンツ美術館（オーストリア）
2015 個展「ファンタズマ」ストックホルム近代美術館（スウェーデン）
2013 個展「Today We Reboot the Planet」サーペンタイン・ギャラリー（ロンドン、英国）
2012 ドクメンタ13（カッセル、ドイツ／カブール、アフガニスタン）

AKNプロジェクト AKN PROJECT

2020年沖縄県で発足。沖縄県拠点。

『喜劇 人類館』2022 | Photo: 小高政彦

『人類館』によって沖縄出身で初めて岸田戯曲賞を受賞した劇作家・知念正真（1941-2013年）の作品を継承するために、娘の知念あかねにより2020年に発足。コザ（現・沖縄市）を拠点に活動した演劇集団創造によって初演された『人類館』は、1903年の大阪・第5回勧業博覧会会場近くで"人間の展示"を行った「学術人類館」に発する「人類館事件」を出発点に、日本語、沖縄口、沖縄大和口を織り交ぜ、場面展開にも実験性を持たせた、沖縄演劇史にとって記念碑的な作品である。クラシック音楽の演奏家でもある知念あかねのAKNプロジェクトは、父の作品を『喜劇 人類館』として演出し、これまで2021年にコロナ禍での配信上演、2022年には那覇文化芸術劇場なはーとにて沖縄「復帰」50年特別企画として上演した。

主な発表歴

2022 『喜劇 人類館』那覇文化芸術劇場なはーと（沖縄）
2021 『喜劇 人類館』オンライン配信

ブラック・グレース Black Grace

1995年オークランド（ニュージーランド）[タマキ・マカウラウ（アオテアロア）]で結成。
オークランド（ニュージーランド）[タマキ・マカウラウ（アオテアロア）]拠点。
*[　　]内はマオリ語表記

『Paradise Rumour』2023 | Photo: Toaki Okano

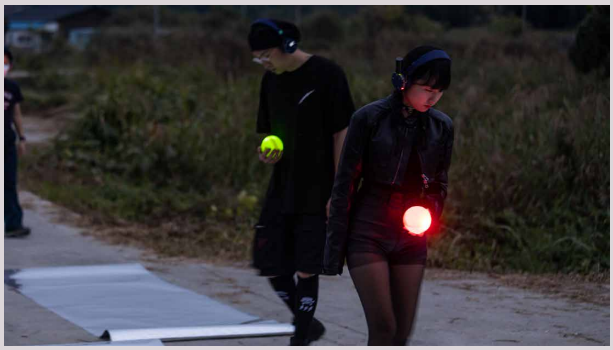
ニュージーランドのダンスシーンに既存の価値観に捉われない視点や新たな発言の場をもたらすべく、太平洋、マオリ、ニュージーランド系のダンサー10人と共にニール・イェレミアが1995年に結成。サモアとニュージーランドのルーツを生かし、社会、文化、世代の壁を越えた斬新なダンス作品を創作して、ダンスの常識を変え、最もよく知られる文化的なアイコンとなった。ニュージーランド全土をツアーで回り、ダンスの新たな観客層を開拓。作品は極めて躍動的で、南太平洋のストーリー・テリングの伝統に富み、繊細で独特な美しさと力強さに溢れる。ニュージーランドの一流ダンサーを擁し、米国、アラブ首長国連邦、豪州、カナダ、欧州、日本、スコットランド、メキシコ、韓国、台湾、ニューカレドニアを巡演。

主な発表歴

2023 『Paradise Rumour』第15回シャルジャ・ビエンナーレ
「Thinking Historically in the Present」（アラブ首長国連邦）
2022 『O Le Olaga – Life』ジェイコブズ・ピロウ・ダンスフェスティバル2022
（マサチューセッツ、米国）
2018 『Crying Men』ASBウォーターフロントシアター（オークランド、ニュージーランド）
2016 『As Night Falls』ヘラルド・シアター（オークランド、ニュージーランド）
2012 『Vaka』第9回釜山ダンスフェスティバル（韓国）

クォン・ビョンジュン Kwon Byungjun

1971年ソウル（韓国）生まれ。ソウル（韓国）拠点。



「"We Will Have a Serious Night" by Ghost Theater」2022、 HongDong Reservoir | Photo: ARKO

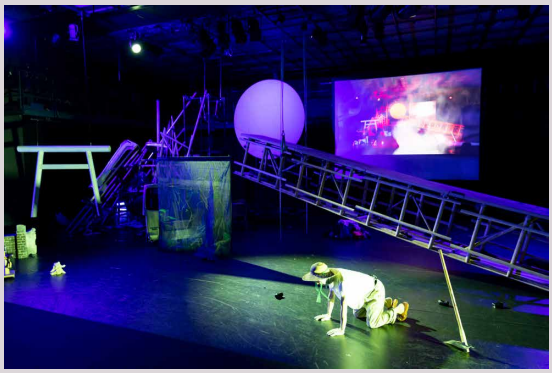
クォン・ビョンジュンは1990年代初頭にシンガーソングライターとして活動を開始。オルタナティヴ・ロックからミニマル・ハウスまで幅広いジャンルの音楽アルバムを6枚発表し、さらに映画のサウンドトラック、演劇、ファッション・ショー、モダン・ダンスなど多様な分野にわたる作品を手掛ける。2000年代末にはオランダに渡り、アートサイエンスを学ぶ傍ら、ライブパフォーマンス用の電子楽器を開発するSTEIMでハードウェア・エンジニアを務める。2011年韓国に帰国後は、新しい楽器や舞台装置を開発・活用してドラマチックな「シーン」を生み出す音楽、演劇、美術を包括したニューメディア・パフォーマンスを制作。アンビソニックス（没入型3Dオーディオシステム）を活用したマルチチャンネル・サウンドインスタレーションの第一人者である。ロボットを用いた感覚刺激的なパフォーマティブ・インスタレーション作品でKorea Artist Prize 2023を受賞。

主な発表歴

2023-24 「Korea Artist Prize 2023」国立現代美術館（ソウル、韓国）
2022 個展「"We Will Have a Serious Night" by Ghost Theater」HongDong Reservoir（ソウル、韓国）
2021 個展「"We Will Have a Serious Night" by Ghost Theater」南山谷韓屋村（ソウル、韓国）
2021 個展「Neverland Soundland: Kwon Byungjun – Sound Walk」釜山市立美術館（韓国）
2020 個展「Club Golden Flower」Cosmo 40（仁川、韓国）

オル太 OLTA

2009年神奈川県で結成。東京都拠点。



『生者のくに』2021 | Photo: 前澤秀登

ビジュアルアーツ／パフォーミングアーツの制度との折衝や、社会学的／民俗学的フィールドワークを重ね、絵画、インスタレーション、映像、パフォーマンス、演劇など、多様な手法を用いて活動を展開する5人組のアーティスト集団。メンバーは井上徹、斉藤隆文、長谷川義朗、メグ忍者、Jang-Chi。日本の近現代を象徴する舞台装置のなかで、疎外や抑圧についての歴史の反復構造を身体的に問う作品を発表する。様々な共同体の基盤を揺さぶり、それらを支えている思考や慣習、言語、生活様式を浮かび上がらせる。

主な発表歴

2023 『ニッポン・イデオロギー』横浜国際舞台芸術ミーティング2023、BankART Station（神奈川）／ロームシアター京都
2020 『超衆芸術 スタンドプレー』ロームシアター京都
2016 釜山ビエンナーレ2016「Hybridizing Earth, Discussing Multitude」（韓国）
2014 第16回ソウル・マージナル・シアター・フィスティバル（韓国）
2013 「内臓感覚—遠クテ近イ生ノ声」金沢21世紀美術館（石川）

セルマ&ソフィアン・ウィスィ Selma & Sofiane Ouissi

セルマ・ウィスィ、1975年チュニス（チュニジア）生まれ。チュニス（チュニジア）、パリ（フランス）拠点。
／ソフィアン・ウィスィ、1972年チュニス（チュニジア）生まれ。チュニス（チュニジア）拠点。

『Bird』2023 | Photo: Pol Guillard

セルマ&ソフィアン・ウィスィのデュオは、振付家、ダンサー、キュレーターとしてキャリアの初期から共に創作およびパフォーマンスを行う、アラブ圏のコンテンポラリーダンス界における代表的な存在である。
両者は共同で、2007年にチュニスにアートプラットフォーム「L'Art Rue」を設立し、アーティスティック・ディレクターとしてチュニジアにおける現代アートの制作と普及、教育活動にも尽力している。また、地域社会と密接に関わるなかで、2007年に社会的な問題や都市空間をテーマにした領域横断的な芸術祭「ドリーム・シティ」を共同で創設、以後共同ディレクターとしてフェスティバルを率いる。

主な発表歴

2024 『Bird』フェスティバル・ドートンヌ（パリ、フランス）
2023 『Bird』第15回シャルジャ・ビエンナーレ「Thinking Historically in the Present」（アラブ首長国連邦）
2020 《Wajdan》グッゲンハイム・アブダビ（アラブ首長国連邦）
2017 『Le moindre geste』49ノール6エストFracロレーヌ（メッス、フランス）
2014 『Les yeux d'Argos』テート・モダン（ロンドン、英国）

態変 TAIHEN

1983年大阪府で結成。大阪府拠点。

Photo: Hikaru Toda

「身体障碍者の障碍じたいを表現力に転じ未踏の美を創り出すことができる」という金満里の着想に基づき、1983年に創設。作・演出・芸術監督を自身がポリオの重度身体障碍者である金が担ってきた。その方法は、身体障碍者がその姿態と障碍の動きとをありのままに晒すユニタードを基本ユニホームに、健常者社会の価値観では醜いとされるその身体から、従来の美醜観を掻き回すような表現を引き出す。従来、身体表現に求められてきたコントロールと再現性に真っ向から反する、一期一会の表現だと言える。その舞台を通して観客も、自身の日常を超え、いつしか非日常のパフォーマーの身体を共に生き、自身の身体を解放させ、命に触れるのである。

主な発表歴

2023 『私たちはアフリカからやってきた』ABCホール（大阪）
2022 『白花弁の歌』AI HALL（兵庫）
2021 『さ迷える愛・序破急』横浜国際舞台芸術ミーティング2021（神奈川）
2005 『マハラバ伝説』テアター・デア・ヴェルト2005（シュトゥットガルト、ドイツ）
1997 『DEPARTED SOUL』第11回ベルン国際舞踏祭（スイス）

ラーニング

国際芸術祭「あいち2025」のラーニング・プログラムは、誰もが安心して楽しめる環境づくりを目指します。「あいちトリエンナーレ2010」から15年にわたって芸術祭を支えてきた存在であるボランティアとともに、来場者も地域の方々も、それぞれの立場で積極的に参加できる仕組みづくりをミッションに掲げています。
具体的には、愛知芸術文化センターと瀬戸市内にラーニングの拠点を設け、研修や、レクチャー、ワークショップなどのプログラムを実施するとともに、休憩やおしゃべりなどにも利用できるような学びと憩いの場として整備します。加えて、ボランティア一人ひとりが今まで以上に主体的に芸術祭に関われるようなボランティア・プログラムを検討しています。
また、これまでの「あいち」の芸術祭で実施してきた、子ども達が現代アートに触れる学校連携事業や、ボランティアによるガイドツアー等を継続していくとともに、障害のある方や妊婦の方、小さなお子さんを連れた方や日本語以外が母語の方なども視野に入れた、アクセシビリティの向上にも取り組んでいきます。
「あいち2025」開催に先駆け、2024年10月〜11月には、瀬戸市のまちなかに期間限定のプレ拠点を設けます。さらに、「ラーニングを学ぶ」第一歩として「ラーニング・ラーニング」という名称のプレイベントを立ち上げ、今後、勉強会やまち歩きプログラムを実施していく予定です。
今回のラーニング・プログラムは、建築家、リサーチャー、写真家、アートマネージャー、アーティストという多様な専門領域を持った5名のメンバーが企画・運営しています。本芸術祭のテーマを踏まえて議論を重ね、多様な人々が暮らす社会において、私たちはどのような学びと向き合うことができるのか、という課題について考え続けています。
異なる立場で実践を重ねてきた私たちはそれぞれの専門知識と経験を活かし、しばしば自分の経験や立場を省みながら、誰もが安心して楽しめる芸術祭を実現するために尽力していきます。

ラーニングチーム

（左から）村上慧、野田智子、辻琢磨、黒田菜月、浅野翔

辻琢磨　Tsuji Takuma

静岡県生まれ。静岡県拠点。
建築家。2008年横浜国立大学建設学科建築学コース卒業。2010年横浜国立大学大学院建築都市スクールY-GSA修了。2011年403architecture [dajiba]設立。2017年辻琢磨建築企画事務所設立。2022年合同会社辻琢磨建築企画事務所に改称。現在、渡辺隆建築設計事務所特別顧問。2014年「富塚の天井」にて第30回吉岡賞受賞※。2016年ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館にて審査員特別表彰※。
※共に403architecture [dajiba]として受賞。

浅野翔　Asano Kakeru

兵庫県生まれ。愛知県拠点。
デザインリサーチャー。2014年京都工芸繊維大学大学院デザイン経営工学専攻修了。同年から、名古屋を拠点に活動を始める。「デザインリサーチによる社会包摂の実現」を理念に掲げ、調査設計、ブランド・商品開発、経営戦略の立案まで、幅広いジャンルで一貫したデザイン活動を行っている。「未知の課題と可能性を拓く、デザインリサーチ手法」を掲げ、文脈の理解〈コンテクスト〉と物語の構築〈ヴィジョン〉を通した、一貫性のある提案を行う。合同会社ありまつ中心家守会社共同代表。

黒田菜月　Kuroda Natsuki

神奈川県生まれ。東京都拠点。
写真家。2013年第8回 写真「1_WALL」にてグランプリを受賞。人と人との間に写真をおくことで起こるやりとりに関心を持つ。近年は、フィールドワーク、ワークショップなどを交えた映像作品も手がける。また、公立動物園の周年企画に携わるなど幅広い活動を行う。主なグループ展に2023年 東京ビエンナーレ「動物園の避難訓練」。主な個展に「『約束の凝集』vol. 3 黒田菜月 写真が始まる」gallery αM（2021、東京）、「つくりかけラボ13　野鳥観察日和」千葉市美術館（2023）などがある。

野田智子　Noda Tomoko

岐阜県生まれ。京都府拠点。
アートマネージャー。2020年よりアートマネジメントとメディアプロデュースを軸にしたアーツプロダクション「Twelve Inc.」を共同設立し、芸術文化の環境創造とアーティストとの協働を行う。アーティスト・コレクティヴ「Nadegata Instant Party」メンバー。主な仕事に「あいちトリエンナーレ2019」ラーニングセクションマネジメント（2018-19）、国際芸術祭「あいち」ラーニングコーディネーター（2021-22）、名古屋城を舞台にしたアートプロジェクト「アートサイト名古屋城」プロデューサー（2023-）がある。

村上慧　Murakami Satoshi

東京都生まれ。長野県、東京都、千葉県拠点。
アーティスト。武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。近年は千葉県山武市に購入した土地で、自然現象を利用した冷暖房を開発する《村上勉強堂》計画を進めている。主な展覧会に「村上慧 移住を生活する」金沢21世紀美術館（2020、石川）、「TERRADA ART AWARD 2023 ファイナリスト展」寺田倉庫（2024、東京）、著書に『家をせおって歩く』（福音館書店、2016）などがある。

キービジュアル

このシンプルで豊かな詩を絵にする。
私がまず考えたのは「薔薇はどこに咲くのだろう」という事でした。
灰は理不尽な破壊や死の結果なのか？
だとしたら薔薇は死者の国に咲くのかもしれない。
わたしは死者の国の住人として幽霊を描くことにしました。
描いているうちに、死んでいるはずの幽霊たちが少し
生き生きとしてきたような気がしました。
"死者の国"と思っていたのはもしかしたら"生まれる前の
者たちの国"なのかもしれない。
それがこの絵です。

五十嵐大介 Igarashi Daisuke

1969年埼玉県生まれ。神奈川県拠点。
多摩美術大学美術学部絵画学科卒業後、1993年「月刊アフタヌーン」（講談社）で四季大賞を受賞し、漫画家としてデビュー。高い画力と繊細な筆致で、自然とそこに住まう生き物たちが混じり合う、どこか恐ろしくも美しい世界を描き出す。代表作に日韓で実写映画化された『リトル・フォレスト』（2002-05）、文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞受賞作『魔女』（2003-04）および『海獣の子供』（2006-11）などがある。現在は「BE・LOVE」（講談社）で『かまくらBAKE猫倶楽部』を連載中。挿絵や装画も多数手がける。

国際芸術祭
あいち2025

灰と薔薇の
あいまに

国際芸術祭
あいち
2025

灰と薔薇の
あいまに

Aichi Triennale 2025:
A Time Between Ashes and Roses

あいうえおかきくけこさしすせそなにぬねのはひふへほまみむめもやゆよらりるれろわをん 〇一二三四五六七八九十
ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ abcdefghijklmnopqrstuvwxyz 0123456789

和文の「石井ゴシック」と欧文の「Gerstner-Programm」は、いずれも写真植字（写植）用に開発され、DTPへの移行とともに姿を消したものの、近年デジタル環境向けに復改刻された書体です。活版に替わって登場した写植の技術は、柔軟な文字組みによる効率的な情報伝達を可能にし、戦後さまざまな用途で力を発揮してきました。複雑な歴史の中で受け継がれてきた書体の再考を通じて、人間と環境の関係を問い直す本芸術祭のコンセプトを体現します。

Photo: Daiki Oka

岡田和奈佳 Okada Wanaka

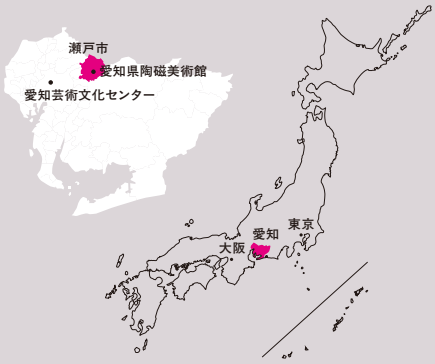
1990年愛知県生まれ。愛知県拠点。
グラフィックデザイナー。信州大学人文学部を卒業後、2018年よりグラフィックデザイナーとして活動。美術の領域を中心に、広報物・書籍のデザインを手がける。デザインを担当した主な広報物として「αMプロジェクト2023-2024 開発の再開発」ギャラリーαM（2023、東京）、「枠と波」豊田市美術館（2023、愛知）などがある。

Photo: Takeshi Miyamoto

加納大輔 Kano Daisuke

1992年愛知県生まれ。神奈川県拠点。
グラフィックデザイナー。芸術・文化領域を中心にブックデザイン、展覧会広報物などを手がける。多摩美術大学版画専攻非常勤講師。主な仕事に、雑誌『NEUTRAL COLORS』（NEUTRAL COLORS／2020-）、デザインジャーナル『Ilmm』（FLOOAT／2024-）、ニコラ・ブリオー著『ラディカント』（フィルムアート社／2022）など。

主な会場



愛知芸術文化センター
Aichi Arts Center

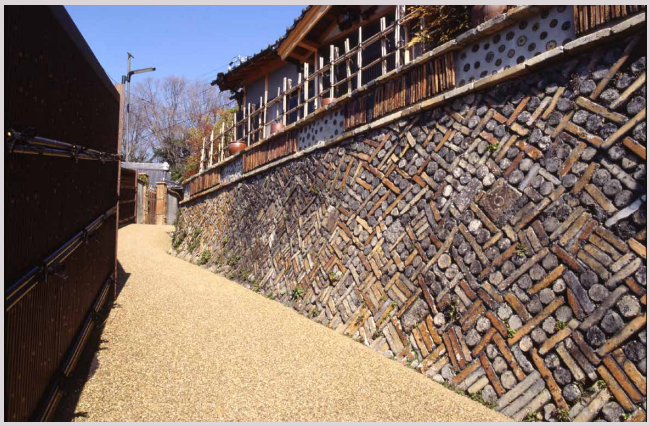
国内外の20世紀美術を中心に充実した作品を所蔵する「愛知県美術館」、大ホール、コンサートホール、小ホールなどを有する「愛知県芸術劇場」、アートスペース、アートライブラリー、アートプラザで構成される「愛知県文化情報センター」からなる複合文化施設。
愛知県の文化芸術の拠点として、名古屋市の中心部に1992年開館。

愛知県陶磁美術館
Aichi Prefectural Ceramic Museum

日本を代表する窯業地・瀬戸に「愛知県陶磁資料館」として1978年開館。2013年に名称変更し、「愛知県陶磁美術館」として新たなスタートを切った。緑あふれる広大な敷地内に、充実した2つの展示施設「本館」「南館」、作陶体験施設「陶芸館」、古窯跡を公開する「古窯館」などがあり、様々な角度からやきものにアプローチするやきもの専門ミュージアム。
2025年4月、改修工事を経てリニューアルオープン予定。

瀬戸市のまちなか
Seto City

名古屋市中心部から北東約20kmに位置し、周囲を小高い山々に囲まれ、千年以上のやきものの歴史を有する人口約13万人の市。
良質で豊富な陶土に恵まれたこの地で、先人たちは新しい技術や文化を柔軟に取り入れ、陶都として発展させたことから、やきものの代名詞「せともの（瀬戸物）」の語源ともなった。
2017年には日本六古窯（瀬戸・常滑・越前・信楽・丹波・備前）として日本遺産に認定され、現在でも、多くの陶芸作家や「ツクリテ」が市内の窯元や工房などで、日々新たな作品を生み出す。窯道具で組まれた窯垣や陶器でできた橋の欄干など、やきもののまちならではの風情が随所に見られる。



問合せ先

国際芸術祭「あいち」組織委員会事務局
（愛知県県民文化局文化部文化芸術課国際芸術祭推進室内）

〒461-8525 愛知県名古屋市東区東桜1-13-2
愛知芸術文化センター内
TEL: 052-971-3111（平日9時〜17時）
E-MAIL: press@aichitriennale.jp

広報用画像貸出等プレス向けサイト:
aichitriennale.jp/press/picture.html
公式サイト：aichitriennale.jp